

小学校における絵の具の指導と絵画作品

京都府京丹後市立五箇小学校

中西 邦郎

1 はじめに

「線描は、そこそこ描けて好きなんだけど…」 「彩色となると思った色が出せない…」 「汚い色になってしまう」など、描画活動に取り組むに当たって、水彩絵の具の使い方、色の作り方などに、児童はさまざまな悩みをもっているようである。それが絵画作品への取り組み、作品の完成に当たって大きな影響を与えるようである。

昨今、公的機関・諸団体が、児童画を募集することが増え、さまざまな場所で作品を見る機会が増えてきた。その中でもやはり、色が十分につくれていないなど、上記のような悩みをもつ作品が見られる。

また、線描に不安をもつ児童も多くいるように考えられる。以上は、児童だけの課題ととらえられがちであるが、我々指導者の課題でもある。

そこで、児童へのアンケート、今までの実践から「小学校における絵の具の指導と絵画作品」について述べてみたい。

そして、この取り組みをまとめることにより、児童が自分の思いを、自分ならではの表現方法で表すことができるように、また、私自身が指導者として児童の思いや願いを表現する支援ができるような指導方法を見つける機会にしたいと考えている。

まず、なぜ絵を描くことが好きなのか？ また、なぜ嫌いなのか？ その理由は？ このことについてアンケートをとってみた。

※本アンケートは、2年間同一学年(5・6年 16名)を対象に取り組んだものである。
本稿にその結果を交えて、考えていきたい。

(1) 絵画について <アンケート 1> 絵を描くのは好きですか

ア 好きな理由

- (ア) 自分の描きたいものを自分の思い通りに描き上げることができる。
- (イ) 絵の具を使うことができる。
- (ウ) 思いがけないきれいな色が出てくるとうれしくなる。
- (エ) いろいろな色が出せる。

- (オ) 自分だけの色をつくることができる。
- (カ) 自分だけの作品をつくることができる。



イ 嫌いな理由

- (ア) 思いどおりに色がつくれない。
- (イ) 思ったように筆使いができなくて、自分の描きたい作品と全く別の作品になってしまう。
- (ウ) 色が変になってしまう。
- (エ) 形がうまくとらえられない。(線描段階において)
- (オ) 人物がうまく描けない。
- (カ) 色をつくるときに筆に含む水の量が加減できずに汚くなってしまう。

資料 1

自分の納得する色をつくり、彩色するというのは、児童にとっては、なかなか難しいようである。冒頭でも述べたが、形がうまくとらえられないのと、思ったような色がつくれないのが描画に対して積極的に取り組めない大きな課題である。色のつくり方の基本的な指導が必要となり、指導した。

ここには、児童の様子、感想を記した。指導内容は、5に記した。資料1(1)、(2)の作品は、色づくりの練習のものである。パレットの使い方、絵の具を出す量、筆洗の使い方、筆の使い方、タオルの使い方として4時間を費やして指導した。このような指導は、学習指導要領によると3年生が望ましいと書いてあるが、それに異論はない。やはり、絵の具を頻繁に使う学年では、どこかの学年で基本をしっかりと教えていきたい。「絵の具の出す量を初めて知った。自分のやっていることとぜんぜん違うとわかった。」「水を上手に使わなければならないことがわかった。」児童の感想である。

2 授業での実際(絵画指導において)【考察】

- (1) 自分の出したい色がつくれていない。
- (2) 単調な塗り方になり、自分の表現したいものが、うまく表せない。
- (3) 色彩とは少し離れるが、描こうとするもの(主題)の線描がうまく描けない。
- (4) 下絵段階での構成力の弱さ(見て描く絵、お話の絵)が、顕著である。
- (5) 経験不足を感じる。(題材決定時)
- (6) 巧緻性の未定着(鉛筆類などの描画材料を扱う力)

- (7) イメージ力の弱さ(お話の絵、想像画など)
(8) アニメの模倣が多く、手足・胴体・脚部・頭部のバランスがとれず、人物が描けない。
(9) 自分の作品を最後までがんばって完成させようという意欲（今までの中で最もよい作品をつくり出そうという意欲の希薄さ）、また、自分の作品を最後まで粘り強くていねいに仕上げようとする責任感の弱さ。



以上は、授業の中で実際に見たり、感じたりしたことである。

基礎的な技術に未定着な点があり、自分の思いが達成できなかつたり、途中で嫌になったりしてあきらめてしまう。このことも含めてこれからの指導の中で細かく指導していかなくてはならない重要なことばかりである。

(1) (2) は、上記 **1** で指導してきた。一度の指導だけでは、なかなか定着しない。描画の単元の指導計画に色づくり（筆のタッチも含め）の指導を入れておくことが必要である。

(3) (6) (8) も計画的に指導計画の中に入れたり、ドリルの時間として期間を決めたりして取り組みたい。割り箸、鉛筆、サインペン、和紙、アート紙などの画材を工夫したい。期間を決めないと「線で描く(クロッキー)」のねらいから外れてしまい、モデルなどをよく見たり、特徴をつかんだりして描くことから逸れてしまう。

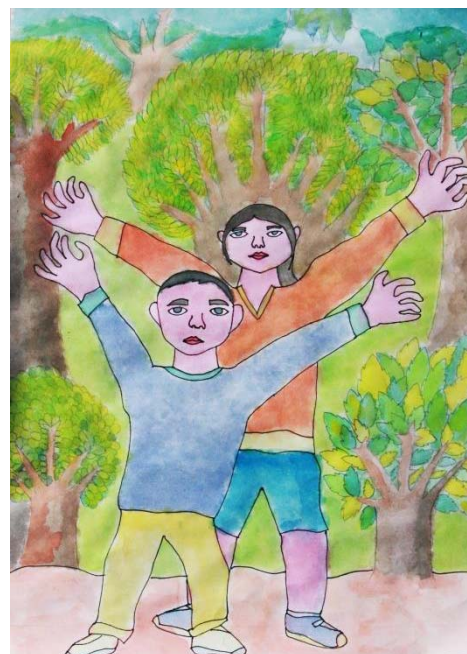
今回は、人物を線で描く（クロッキー）練習に取り組んだが、指導では、体育の服装にさせた。それは、関節がわかることにより、体の部位のプロポーションが理解しやすいからである。

(4) (7) のお話の絵の取り組みには、言語活動も必要である。まず、読み聞かせをしてきた。なぜ読み聞かせが必要かという点、聴覚を使うことは、視覚に訴えると同様にイメージしやすく、長い間、頭の中に残ると思うからである。言葉のスケッチ、劇化（低・中学年の指導では、効果的であると言われるが、現状では、高学年の指導でも使える）、ラフスケッチなども効果的な指導であると考えている。

全校絵画展を毎年実施したり（児童に見る観点を与える）、民間団体からいろいろな作品を借りてきたりして展示している。身近な友達の子どもの作品の素晴らしさに気づき、参考となる点、自分の作品に取り入れたい点などに気づく機会とすることをねらいとしてきた。

(5) は、図工だけではなく、各教科をしっかりと学習し、家庭での手伝いや読書など、さまざまな経験を積むことを奨励し、実践させていきたい。

(9) は、授業の最初に、前時の振り返りとして、個々の作品鑑賞をした。良い点を見つけるとともに、粘り強く、工夫しようということを毎時間確認して取り組んだ。



3 色づくりについて

(1) <アンケート2> 色づくりについて

ア 色をつくるうえで一番楽しいのは、どんなことですか

- (ア) 色を混ぜてつくれること。
- (イ) きれいな色や明るい色をつくる時。
- (ウ) いろいろな色をつくって試す時。
- (エ) きれいな色がたくさんできた時。
- (オ) 自分が満足できる色ができた時。
- (カ) 自分が考えていた色よりもきれいな色がつくれた時。
- (キ) 思いがけない色がつくれた時。
- (ク) 初めて見るような色ができた時。

イ 絵の具で自分の思った色が、つくりやすいのは、何色ですか (複数回答可)

水色 黄緑色 紫 オレンジ こげ茶色

ウ 色をつくる時に難しいと感じることはどんなことですか (複数回答可)

- (ア) 混色をするときに各色の量がわからなくて、思っているような色がつukれない。
- (イ) 水の量がわからなくて、色の濃淡がつかみにくい。
- (ウ) 自分の思った色がつukれない。
- (エ) 汚い色しか出せない。
- (オ) 同じような色で変化をつけていくのが難しい。



エ 絵の具で一番つくりにくい色は、何色ですか (1色のみ)

①肌色

- ②深緑
- ③木を感じさせる色
- ④こげ茶色



オ 絵の具でつくりにくいと思う色は、何色ですか（複数回答可）

- ①肌色
- ②ねずみ色
- ③こげ茶色
- ④深緑
- ⑤茶色

カ 絵の具でつくりにくい色は、どんな場所ですか（複数回答可）

- ①人肌
- ②コンクリートの地面
- ③木の色
- ④海（水）
- ⑤ガラス
- ⑥山の色
- ⑦葉っぱの色
- ⑧海にできる黒い影
- ⑨山の感じが出る所
- ⑩土
- ⑪光っている所



キ 絵の具でつくりやすい色は、どんな場所ですか（複数回答可）

- ①空
- ②空の色の薄い所
- ③野菜の色
- ④太陽



ク 自分で思った色が出せないのは、何が原因だと思えますか（複数回答可）

- ①水が多い・水が少ない
- ②多くの色を混ぜすぎる
- ③初めから濃い色をつくってしまう
- ④色と水の混ぜ具合が少しわからないところ
- ⑤絵の具を出しすぎてしまうこと

アンケート2からの考察

色をつくっていくことで、最もうれしいのは自分の思った通りの色ができること、きれいな色、思いもかけないような色がつくれたときである。また、混色も思った通りにできると楽しく作品に取り組める。

空の色、水（海）の色はつくりやすく、失敗が少ないため、児童は安心してつくっている。

こげ茶色はつくりやすいが、作品に大きな影響を与えると考える児童も多くいて、慎重に取り組んでいる。

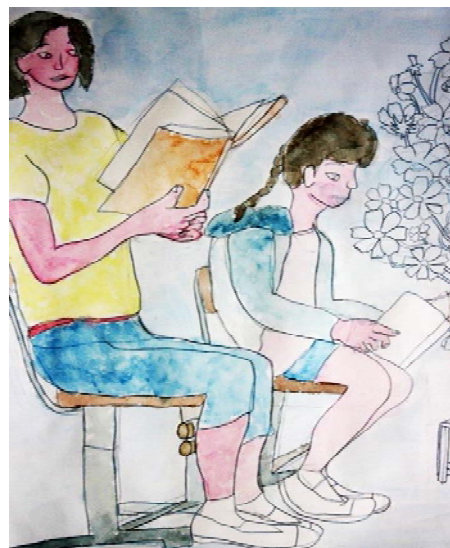
混色時の色の量、水の量を理解するのは難しく、何度もつくったり、作品と同様の画用紙を試し紙としてつくった色を塗ったりして、確認していくことが大切である。そういった経験を積み重ねていくことにより、理解できることを指導することが大切である。

パレットに全色出し、両隣の色を混色していくことにより、色の仲間がくれ、同色の中でも変化が出てくることを指導しておくことが大切である。

肌色は、一見簡単につくれそうであるが、どうしても多くの色を混ぜ合わせてしまうためにつくれぬ。水も一色として色数を少なくしたり、透明水彩的に使ったりすることを指導しておくことよい。

ネズミ色（グレイ）もこげ茶色もインパクトが強く、前述のとおり、作品に大きな影響を与えるものである。試し紙を使用することが必要である。そして、まわりの色を少し入れたりすることも必要であろう。こげ茶色は、試し紙を使用し、薄い色から重ねていくことが大切であると考えられる。

ガラス、光が入っている部分は、最初は薄く塗り、まわりの色を少し入れていくこと



が必要である。

4 題材と技術について <アンケート3> 題材について

(1) 何を題材に絵を描いてみたいですか？（複数回答可）

- ア 友達
- イ 自分の飼っている動物（ペット）
- ウ 森や花（自然）
- エ 自分の家
- オ 学校
- カ 果実



(2) 絵を描くときに何が一番難しいですか。下の（ア）から（キ）も参考にして考えて下さい。（複数回答可）※回答が多いものからア～クとなっている。

- （ア）下絵を描く （イ）パレットの使い方 （ウ）筆洗の使い方
- （エ）筆の使い方 （オ）水の使い方 （カ）色をつくる （キ）塗り方

- ア 重色が難しい。
- イ 水の使い方
- ウ 色をつくる
- エ 筆の使い方
- オ 下絵を描く
- カ 塗り方
- キ パレットの使い方
- ク 筆洗の使い方



アンケート3からの考察

指導していくうえで多くの指導者が、いつも頭を痛めるものの一つに題材を何にするかがあげられる。

アンケートの（1）からもわかるように、自分との関わりが強いものが多い。自分が、どのように関わったのかが大切である。関わりが薄いものは、作品と距離ができてしまい、自分が入っていないような作品になってしまう。

お話の絵でも題材を選ぶときには、まず、児童との関わりの強いものを考えたい。

5 きれいな色を出すには (指導内容) ※児童作品は資料 2 参照

(1) 色のつくり方

絵の具を水でしっかりと溶くことが、最も大切なことである。

混色は、3～4色までとし、それ以上になると色が濁ったり、より黒色に近くなったりしてしまう。

重色は、明度の高い色（薄い色）から塗っていく。前の色が、乾いてから後の色を塗っていくことが大切である。

(2) 筆の使い方 (図 1 参照)

私は、筆の a までを頭（あたま）、b を腹（はら）、c を腰（こし）と呼んでいる。使うのは a、b と言っている。

そして、筆を立てて使うことを指導している。

小学校では水彩絵の具だけではなく、さまざまな画材を使うため、筆はポリエステル素材が好ましいように思う。

パレットから色をとるときは、まずアの面を使い、次の色をとるときは、イの面を使うように指導している。できる限りパ

レットの絵の具を汚さないように指導している。そして、筆を立て、水を加えて、a の部分でしっかりと混ぜるように指導している。

塗り方は、塗り込むのではなく、筆の跡が残るように色を置くつもりで着色するよう指導している。

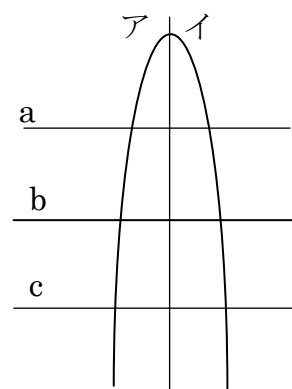


図 1 筆

(3) 筆洗の使い方 (図 2 参照)

水を如何に上手に使うか。水の使い方が小学生の色づくりの上手な色のつくり方の大部分を占め、最も重要なことである。

きれいな水で絵の具は生き、汚い水ではそのよさを発揮することはできない。筆洗にも丸型や長方形の形をしたものがある。形は、どんなものでもよいと思う。

図 2 の a を筆の洗う所、b、c をすすぐ所、d を色をつくるためにつける水といつも決めておきたい。なかでも大切なのは、すすぐ所である。ここで前に使った色をしっかりと落としておかないと、きれいな色はできない。

すすぐ場所を大切に考えたい。この場所が汚れたら、きれいな水にかえたい。その目安として b、c の場所に薄い色（白っぽい）

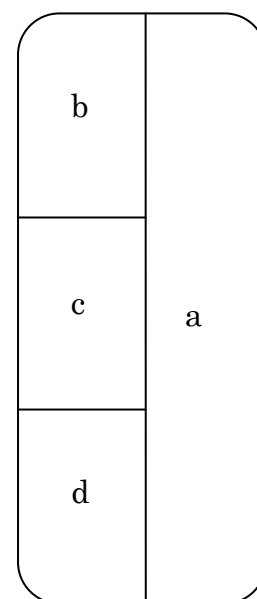


図 2 筆洗

をした石を入れておき、その石が見えなくなったら、水をかえるように指導している。

筆洗によっては、3部分からなっているもの、4部分からなっているものときさまざまであるが、すすぐ場所を多くとりたい。

その後、筆をタオルでしっかりと水をきり、穂先を整えてから、色をとるように指導している。また、タオルも色づくり、描画作品づくりに欠かせない、大切なものである。

(4) パレットの使い方 (図3参照)

aの部分には、紙箱などに書いてある絵の具の名前を順番通りに全色出していくように指導している。それは色彩感覚を高めるためである。また、色をつくるときに両隣の色を混ぜることにより、色の仲間ができ、色の種類を増やすことをねらいとするためである。

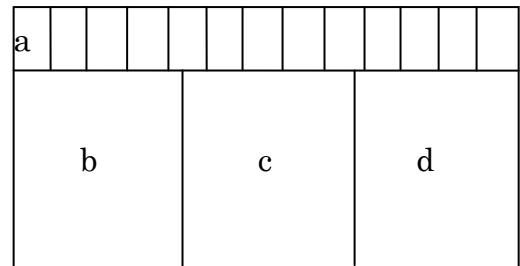


図3 パレット

b、c、dの部分は、混色するための場所として指導している。例えば、bなら赤色系、cなら茶色系、dなら緑色系というように同系色をまとめてつくるように指導している。bの中にcやdの色を入れたりしないようにしている。どれだけ色がつくれたか、合う色がどれかがわかり、混同して汚れた色にならないようにするためにも指導している。

aに絵の具を小指の爪程度出し、b、c、dでは、混色するときは500円玉くらいの大きさにするように指導している。たくさん使う色は、もっと多くの色をつくるように指導している。

基本的に、パレットは手に持って扱うように指導している。

6 最後に

私の考えるよい絵とは、上手な絵や美しい絵を言うのではない。よい絵とは、下記のような絵をいうのであると考える。

- (1) 自由で明るく伸び伸びとした絵
- (2) 個性があり、夢やお話がある絵
- (3) 感動の表れた絵
- (4) 最後まで粘り強くやり通した絵
- (5) 自分で工夫した絵

上述の通り、児童が自分の思いを自分ならではの表現方法で表すことができる。



また、私自身が、指導者として児童の思いや願いが表現できるような指導技術、支援の方法を見つけ行きたいと考える。

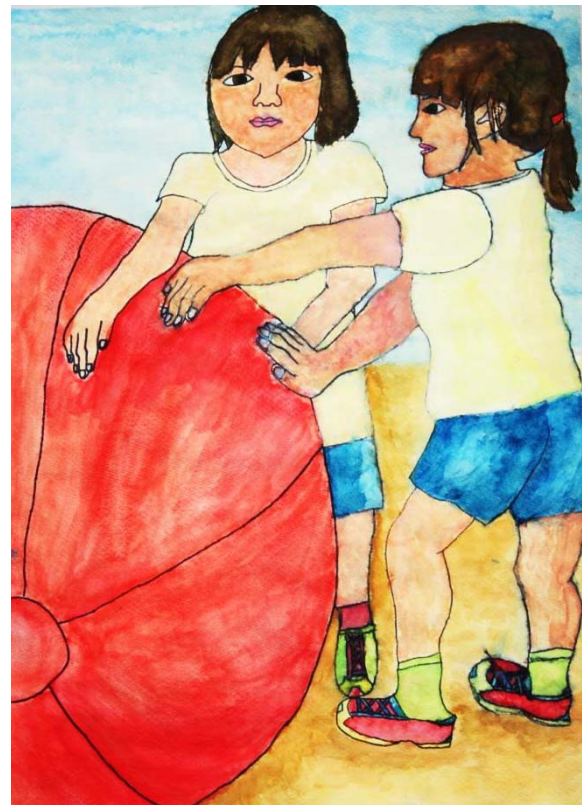
■資料 1 (色のつくり方の指導) (1)



■資料 1 (色のつくり方の指導) (2)



■資料 2 (きれいな色を出すには 児童作品)



※本実践は、前任校での取り組みを中心にまとめたものである。